

地域住民の相互扶助を目的とした高齢者教育

— 高知県における「シルバー介護士養成講座」を例として —

宮 上 多加子

〔抄 録〕

本研究の目的は、高齢者の学習活動に関連する要因を明らかにし、高齢者の地域福祉活動を促進する目的で実施されている高齢者教育のプログラム評価を行うことである。高知県の「シルバー介護士養成講座」を事例として、参加観察法とノールズ (Malcolm S. Knowles) のアンドラゴジー理論に基づいて作成した質問紙調査を行った。分析の結果、講座の受講者は自分たちの経験を通じて学習活動への参加動機を高めしており、受講者の経験を学習活動の中で活用することが重要であることが示された。学習活動においては、講師の高齢者教育に関する経験が、受講者の学習への集中や相互の交流に影響していた。また、学習の評価は講師と受講者が相互に行い、受講者の個別的な学習課題を明確にする必要があることが示唆された。しかし、受講者は自分たちのニーズを学習内容に反映させる事にはあまり重要性を認識していないため、高齢者の主体的な学習活動を促進するためには、プログラム運営上の改善が必要である。

キーワード：高齢者教育，アンドラゴジー，地域，介護

I. はじめに

1. 研究課題設定の背景

日本の平均寿命は、過去50年の間に男女とも25年以上という驚異的な延長を記録し、世界の中でも有数の長寿国となった¹⁾。しかも、一定の年令に達した後は社会の生産的な活動から引退することが慣例となっている現代社会においては、この平均寿命の延長はそのまま引退後の期間が非常に長くなったことを意味する。従って、この期間をいかに意義あるものにするかは、個人が充実した生涯を送るという観点からはもちろん、社会全体の機能的な側面からも重要な課題となっている。

また、一般に人間は加齢と共に身体機能が低下し、同時に有病率も増加するために、高齢者

の数が増加すると、虚弱な高齢者や医療・介護が必要な高齢者の数もまた増加する。このような介護高齢者は、年齢層が高くなると増加するものの、高齢者全体では1～2割とされており、残り8割以上は自立した高齢者である。この中には、健康に恵まれ活動意欲も高く、他の人に対しても何らかの援助を行うことができる高齢者も多く存在すると考えられる。渡辺²⁾は、シュロック(M. M. Schrock)の提唱した高齢者人口の健康度の分布を示しながら、自立した高齢者やより高い能力に恵まれた高齢者の可能性について言及している。つまり、元気な高齢者、あるいはこれから自分が高齢期を迎える世代の人々にとって、介護が必要な高齢者を支援していくことは、ケアサービスの担い手となると同時に、生きがいや自分自身の高齢期への準備という側面からも大きな意義がある。

2. 研究の目的と意義

本研究の目的は、地域の介護福祉マンパワーの養成を目的とした高齢者教育の事例である「シルバー介護士養成講座」を取り上げ、学習者としての講座受講者の特徴を明らかにするとともに、成人教育の視点から高齢者教育のプログラム評価を行うことである。

西岡³⁾は、ヒームストラ(Roger Hiemstra)による高齢者の学習内容の分類をもとにして、日本における高齢者教育の実践事例を分析しており、その結果、日本の高齢者教育は、趣味・文化・教養等を目的とした活動が中心で、学習成果を地域活動・ボランティア活動・職業に生かせるような活動はあまり行われておらず、この分野の研究も進んでいないとしている。また、『社会教育』巻末資料の「生涯学習・社会教育関連記事・論文索引」に記載された過去10年間の先行研究、および1990年から1995年版『教育学論説資料』の「生涯教育・地域と教育」分野に掲載された論文の中から、本研究に関連のある文献を分析した結果も、これを裏付けるものとなっている。

さらに、介護福祉マンパワー養成教育においては、より高度な知識と技術を持った専門職の養成が中心であり、専門職以外のマンパワーとして、地域において住民の相互支援活動を行うことが可能となるだけの知識や技術の習得を目指す学習活動に対する研究は、まだ十分にはなされていない。

しかし、高齢社会の進展に伴って、高齢者の力を社会の中で役立てようという社会からの要請とともに、高齢者自身の社会活動参加への意識も高まっていることが示されている⁴⁾。従って、今後は教養や楽しみのための学習だけでなく、実践的な活動を行うために必要な学習が発達になると予想され、高齢者の学習は質的な転換を迎えると思われる。このような変化に対応して、高齢者の力を引き出し、学習活動に対する満足感を与え、さらに社会活動が効果的に行われるためには、高齢者教育における方法論を確立することが必要である。

Ⅱ. 生涯教育からみた高齢者教育

1. 加齢による変化と高齢者の学習能力

高齢者の学習を考察する際には、学習に影響を及ぼす身体的・精神的変化について確認しておく必要がある。Glass⁵⁾は身体的能力における変化と知覚の変化について先行研究の結果をもとに分類しているが、高齢者の年齢的な定義については明示していない。人間の身体的能力の多くは20歳をピークとして、以後徐々に下降していくと言われているが、下降の速度については機能の種類や個体の遺伝的素因あるいは環境の影響等によって、個体差が大きいことが知られている。従って、個人の歴年齢によって高齢者の定義を行うことは、特に個別性に配慮した場合には適切でないこともありうる。また、連続的な過程である変化をある時点で分断することにも問題が残ると思われる。しかし、マクロな視点に立てば、高齢期は青年期とは明らかに身体的・精神的機能において異なっており、学習に対する配慮もその変化に対応したものである必要がある。

Glassは、高齢者の身体的・心理的な特徴に対して教育を実施する際の具体的な方策を示しているが、それらに共通した特徴として、高齢者の低下した能力を補うような工夫をすることと、高齢者が学習に対して脅威や不安を抱かないように配慮することを強調している。

2. 高齢者教育の理論的背景

高齢者に関する教育は、一般に「老年教育(学)」(Gerontological Education)と呼ばれ大別すると、①一般市民対象の、加齢(aging)の過程や高齢期の生活についての教育、②成人教育のうち、高齢者を主な対象とする部分、③前記①と②の指導者のための専門教育という3つの領域からなっている⁶⁾が、本研究においては、成人教育のうち、高齢者を主な対象とする領域を高齢者教育として扱う。

成人教育学の代表的な理論にアンドラゴジー (Andragogy)⁷⁾理論があるが、アメリカでアンドラゴジーの基礎理論から実践技術に至るまで一貫した理論体系を樹立し、学問的市民権を確立したのは、マルコン・ノールズ (Malcom S. Knowles) である。西岡⁸⁾によるとノールズのアンドラゴジー理論は、サイコセラピーを基にするとともに、アブラハム・マズロー (Abraham H. Maslow) やエリック・エリクソン (Erick H. Erikson) 等の業績をも参考にしている。従ってアンドラゴジーの前提となっているのは、個人が青少年期から成人期へ移行するにつれて発達する諸特徴であり、特に成人になる過程で学習者の「自己概念」(self-concept)は、依存的パーソナリティから脱皮し「自己主導性」(self-directedness)を増大することが、子どもを対象とした教育学(ペダゴジー)とは異なる点であるとされている。つまり、アンドラゴジーの教育モデルは、学習者中心で学習者自身の自己主導的学習を支援・促進することに焦点化されており、これがアンドラゴジーの教育原理となっている。

しかし、アンドラゴジー理論がそのまま高齢者教育においても適用できるのかどうかについての議論は、まだ明確にはなっていない。高齢期には特有な身体的・精神的な変化が見られ、学習活動においても、その変化に対応した配慮が必要となるが、アンドラゴジーの理論的基礎の部分が高齢者に対してもそのまま適用されるのか、あるいは修正されるのかという点が示されていないのである。これに関して川延⁹⁾は、木全力夫がノールズや池田秀夫・堀薫夫らの学習者モデルを参考にして、ペダゴジー（Pedagogy：学校教育学）モデル、アンドラゴジー（成人教育学）モデル、ジェロゴジー（Gerogogy：高齢者教育学）モデルとして作成した試案を紹介している。この試案の中では、「学習者の概念」は、アンドラゴジーモデルにおいて自己主導性が増大していたのに対して、ジェロゴジーモデルでは、加齢に伴って依存的な自己概念を持つようになるとされている。ただし川延は、ジェロゴジーモデルは実践的には高齢期後期に適用されるとして、高齢期前期での学習活動では、アンドラゴジーモデルとジェロゴジーモデルの双方を配慮しながら進める必要があると述べている。この川延の試案を参考にすると、本研究で取り上げた高齢者教育の実践事例は60歳代と70歳代の受講者が大半を占め、また学習活動に対して意欲的な集団であるという特徴から、アンドラゴジーモデルを中心として、部分的にジェロゴジーモデルの要素を加味して分析をしていく方が適切であると思われる。

さらに、アンドラゴジー理論は欧米の価値観を背景に生み出されたものであり、学習においても自立性や主体性を強調するこの理論が、どの程度日本の高齢者に当てはまるのかも検討されていない。従って、本研究で対象とする高齢者の持つ社会的・文化的背景をふまえた上で、講座受講者の学習者としての特徴を考察していく必要がある。

Ⅲ. 現代社会における高齢者教育

1. 高齢社会における地域の課題

65歳以上の高齢者人口は、総務庁の「人口推計」でみると、2,051万人（1998年10月1日現在）となり、総人口に占める割合（高齢化率）は16.2%となっている。また、高齢者の健康状態を厚生省の『国民生活基礎調査』（平成7年）でみると、健康上の問題で日常生活に影響のある在宅の高齢者の割合は、65歳以上で人口千人当たり194.5となっており、これらの要介護者の割合は、年齢階層が上がるにつれて大きく上昇する傾向がある¹⁰⁾。従って、今後高齢者人口が増加し、特に年齢の高い高齢者の数が増加するに従って、日常生活において何らかの介護が必要な人の数は急激に増加するであろうと予測されている。

高知県は、全国的に見ても高齢化率が高く、1998年の総務庁の「人口推計」によると島根県に次いで全国第2位(22.5%)となっている。この高齢化率は今後も上昇すると推定されており、2025年には32.5%になることが示されている¹¹⁾。また、高知県は東西に細長い県の面積の8割に

上を森林が占めるという地形上の特徴から、県中部にある高知市とその周辺の平地に人口が集中しており、中山間地域ではいわゆる過疎地域が多い。市町村別の高齢化率(1998年10月1日現在)を見ても、高知市の17.2%と比較して、他の市町村はすべて20%を越えて全国平均を大きく上回っており、特に中山間地域では40%を越える町村もある¹²⁾。このように高齢化が進行した地域においては、必然的に高齢者だけの世帯や高齢者の独居世帯が増えることになり、地域において何らかの支援を必要とする高齢者の数も増加すると予測される。従って、このような高齢者に対する支援体制を早急に確立することが大きな課題となっている。

2. 地域の福祉マンパワーとしての前期高齢者

西岡¹³⁾は、ニューガートン (Bernice L. Newgerton) が1974年にアメリカの高齢者を2つに分け、54歳から74歳までをヤング・オールド (young-old)、75歳以上をオールド・オールド (old-old) と名付けて2つの年齢層の質の変化に注目したことを示している。すなわち、高齢者が健康状態が悪く、貧しく、弱く、孤立しているというイメージは75歳以上のオールド・オールドから得たものであって、ヤング・オールドの実態は、健康状態、経済状態が良く、学歴も高く、政治への参加も積極的で、社会に対しても大きな影響力を持っているとしている。ニューガートンのこの指摘から20年以上が過ぎ、ヤング・オールドの世代であった人たちがオールド・オールドの世代に移行した現在のアメリカの高齢者の実態は、かなり変化しているときいていると思われるが、54歳から数えて30年前後にわたる高齢期を均質なものととらえずに、前期と後期で異なる様相を指摘した点は、現在の日本の高齢者をとらえる際にも有用な視点であると考えられる。

一方日本では現在のところ、制度的あるいは統計的に65歳以上を一括して高齢者として取り扱うのが一般的である。65歳以上を年代別に分けた資料としては、平成11年版『高齢社会白書』があり、65歳から74歳までを前期高齢者 (ヤング・オールド)、75歳以上を後期高齢者 (オールド・オールド) に分類し、それぞれの年齢層の今後の高齢者人口における推移を分析している。それによると、前期高齢者人口は2016年の1,698万人をピークにその後は減少していく一方、後期高齢者人口は増加を続け、2022年には前期高齢者人口を上回ると予測されている¹⁴⁾。つまり、高齢者全体が増加する中で後期高齢者の占める割合は、今後一層大きなものとなることが示されている。前述したように、要介護者の割合は75歳以上ではそれ以下の年齢層の数倍となるが、75歳未満の高齢者は、健康状態も良い者が多く、気力も充実しており、新しいことに対して取り組む意欲も旺盛な者が多いと考えられる。これらの高齢者は地域の実情に詳しく経験豊富であり、地域の福祉マンパワーとしての大きな可能性を持っている。しかし、これらの人たちの保持している経験や技術は多様であり、直接地域の社会活動に活用できる内容ばかりではない。従って、高齢者自身が持っている経験や技術を活用しながら、それをケアの受け手である介護を必要とする高齢者側のニーズに適合させるためには、何らかの学習活動が必要となる。しか

し、日本における高齢者教育の現状の分析結果をふまえても、高齢者の潜在的な力を生かす教育方法は確立されていないのが現状である。従って、実証的な研究によって、方法を積み重ね、今後の高齢者教育を体系的に構築していく必要がある。

3. 学習者としての前期高齢者の背景

「学ぶ」ということに対する前期高齢者の意識を考察するにあたり、その人たちが育った時代背景を振り返ってみる。現在60歳から75歳の人たちが生まれたのは、1924年から1939年（大正13年～昭和14年）にあたる。1931（昭和6）年には満州事変が起き、日本は国家主義、軍国主義への道を歩むことになる。1941（昭和16）年の日米開戦を経て1945（昭和20）年の終戦を迎えるまで、教育においては国粋主義的教育思想が強調され、教育界は皇道錬成の色彩が強かった。1999年に60歳から75歳の人たちは、終戦時6歳から21歳であり、すでに学校教育を終えていた年齢から、義務教育に達したばかりの年齢まで幅がある。これは経験した学校教育が国粋主義に片寄ったものであった人たちから、学校教育の途中で1947（昭和22）年の教育基本法と学校教育法の公布を経て、民主主義的な教育に転換した人たちまで、様々な時期に教育における非常に大きな転換点を迎えていることを意味している。受けた教育によってその後の学習に対する態度に相違があることは多くの先行研究において示されており、従って、前期高齢者という年齢的な尺度で分けた分類では、この世代の人たちの「学び」に対する意識をひとまとめにできないのではないと思われる。

平成12年版『厚生白書』においても、高齢者人口の増加と同時に、高齢者層を構成する世代の多様性を示しており、昭和10年以降生まれの世代や戦後のベビーブーム世代が今後高齢期を迎えることについて、「これは人口規模の非常に大きな世代が高齢期を迎えることを意味することはもちろん、これまでの高齢者とは違って、戦争を経験しておらず、青年期には既に高度経済成長期に入っていたことなど、その時代や文化的背景の中で異なる価値観と行動様式をもつ世代が高齢世代になることをも意味する。」¹⁵⁾としている。

Ⅳ. 高齢者教育の実践事例におけるプログラム評価

1. 「シルバー介護士養成講座」の内容と研究方法

高知県では、地域において高齢者を支えるマンパワーの1つとして、その地域の実情に詳しい「元気な高齢者」を活用するために、1995年度から「シルバー介護士」養成事業を行っている。これは、高齢者が介護の基礎的な知識や技術を習得することで、高齢者間の相互支援活動を促進することを目的としており、対象者は60歳以上の男女である。定員は1回の講座毎に30人、年に3回開催しており、1999年末までに約400人程が修了している。講座の内容は、「痴呆への対応」や「高齢者の食事」など14科目を8日間、計35時間以上履修するものであり、修了

者は知事名で認定証を受けるようになっている。また、「シルバー介護士養成講座」修了者は、地域の社会福祉活動におけるマンパワーになると同時に、老人クラグ活動や自主的なボランティア活動などの社会活動を促進することも期待されている。

講座受講者の学習活動に関連する要因について明らかにするために、研究方法として参加観察法を用いた。また、ノールズのアンドラゴジー理論をもとにした質問紙調査を行うことにより講座受講者の学習者としての特徴を分析した。

2. 高齢者の学習活動に関連する要因—参加観察法による分析—

(1) 目的

「シルバー介護士養成講座」における受講者の学習活動に関連する要因を帰納的に導き出し、その構造を明らかにする。

(2) 研究方法

①対象者

高知県ふくし交流プラザで1999年2月に行われた「シルバー介護士養成講座」受講者28人である。内訳は男性2人、女性26人、年齢は50歳代2人を除いて、他の受講者は60歳以上である。

②データの収集

筆者は「シルバー介護士養成講座」に観察者としての参加者という立場で参加した。週に2回計8日間の講座の中で、講座の日程と学習内容から偏りのないように3事例を選択した。参加観察時には、その場で講師と受講者の活動をメモ帳に記録した。また、講義および実習の間の休憩時間には、講師と受講者に適宜インタビューを行った。得られたメモをもとにして参加観察記録を作成した。

③データの分析

参加観察法およびインタビューによって得られたデータをもとに、学習活動に関連のある事項を抽出し、一文一義の単文として一次的コード化を行った。このコード化した用語を表計算ソフトExcelに入力し、複数の同じ意義を持つ実質コードをまとめ、類別ラベルをつけた。さらにこれを、学習の場における環境、主体、活動という視点から、『受講者に関するもの』、『講師に関するもの』、『受講者と講師の相互作用に関するもの』、『学習する場に関するもの』の4つの枠組みに分類した。

『受講者に関するもの』の中には、講座の受講以前に受講者がすでに持っている特徴として〈介護体験の役割〉があり、学習活動への参加に関連するものとして〈受講後の活動〉と〈参加動機〉がある。また、学習の場での活動は〈即時の応答〉、〈学習活動からの逸脱〉、〈予測的行動〉、〈受講者の活動の特徴〉、〈受講者間の交流〉から構成されている。『講師に関するもの』には、高齢者教育の経験を中心とした〈講師の経験〉がある。『受講者と講師の相互作用に関するもの』は、講座の中での講師の教授活動と、それに対する受講者の反応であり、〈講師と受講者

の交流)、〈講師の一方的な語り〉、〈講義の中での気分転換〉が含まれている。学習環境としての『学習する場に関するもの』には、物理的環境を中心とした〈身体的安楽が必要〉と、講座主催者によるプログラム運営上の特徴として〈管理的雰囲気〉がある。

(3) 結果および考察

講師が受講者をどのように取り扱っているのか、また受講者がそれにどのように反応を返しているのか、それらに関連するものは何かという視点から類別ラベルをカテゴリーにまとめると、「学習への動機づけ」「受講者の持つ経験の役割」「学習活動への準備と集中」「講師の経験に基づく教授方法」「相互の交流」「学習環境の調整」という6つのカテゴリーが得られた。

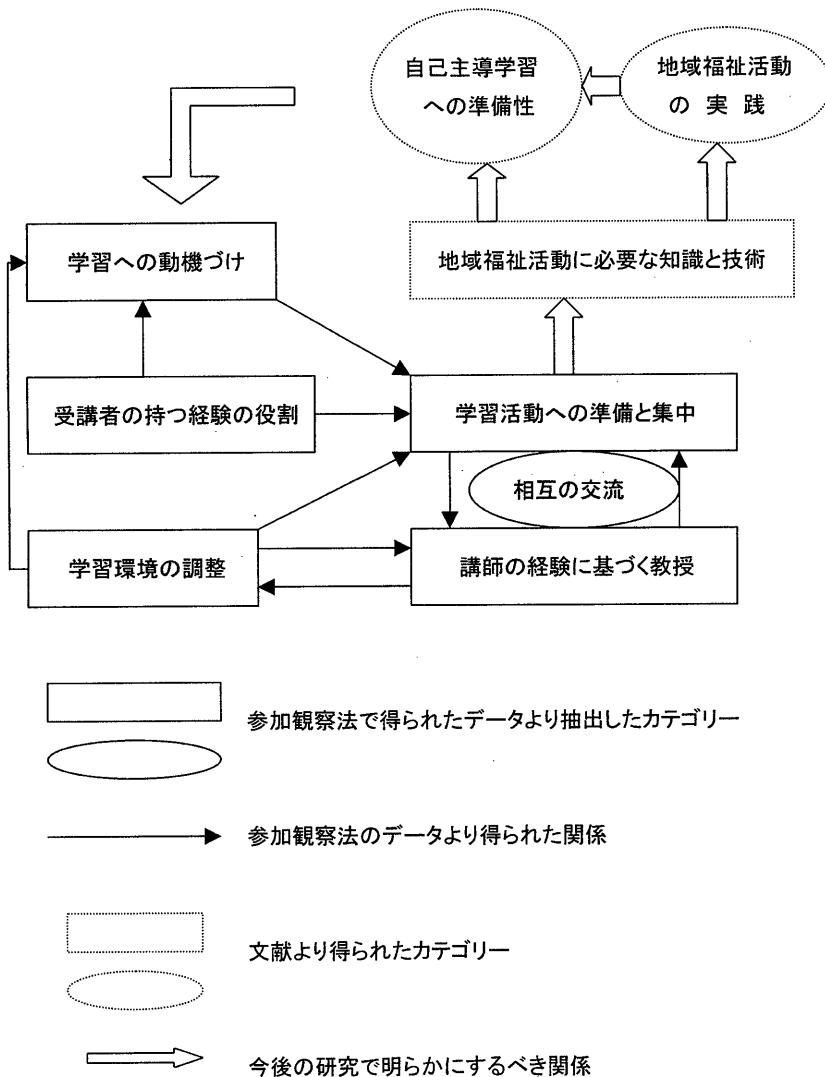


図1 講座受講者の学習に関連する要因

さらに、これらのカテゴリーと、成人教育に関する文献より得られたカテゴリー相互の関係を概観し、構造化すると図1のようになった。すなわち、「学習環境の調整」は、「学習活動への準備と集中」および「講師の経験に基づく教授」に影響し、また参加者の「学習への動機づけ」も促す。同時に「受講者の持つ経験の役割」も「学習への動機づけ」と「学習活動への準備と集中」に影響する。受講者は、「講師の経験に基づく教授」を受け、「学習活動への準備と集中」をして学習活動を行うが、そこには講師と受講者、また受講者同士の「相互の交流」が生まれる。受講者は講座に参加することで『地域活動に必要な知識と技術』を習得して、『地域福祉活動の実践』を行い、同時に学習の体験と活動の実施は『自己主導学習への準備性』を高めるかも知れないと考えられる。それは、さらに「学習への動機づけ」を高める可能性がある。

以上のように、参加観察法によるデータの分析結果から、講座の受講者は自らの経験に基づいて学習への動機づけを高め、学習の場へ参加している点と、講座での学習活動においては講師の高齢者教育に関する経験と教授方法が、受講者の学習活動への集中や相互の交流に影響している点が明らかになった。また、学習への間接的な影響要因としては、物理的環境や講座の主催者による受講者への対応があった。従って、高齢者の学習活動を促進するためには、高齢者の持つ経験が学習への動機づけを高めるように配慮すると同時に、学習の場においては高齢者の特徴を考慮した教授方法を展開し、高齢者が学習活動に主体的に参加するように工夫しなければならないと考えられる。

3. 講座受講者の学習者としての特徴 — 質問紙調査による分析 —

(1) 目的

ノールズが示しているアンドラゴジー実践における留意点について、「シルバー介護士養成講座」受講者の講座に対する評価と、そのような留意点が自分たちの学習に対してどの程度重要性を持つかという受講者の認識を測定する。得られた結果に基づいて講座のプログラム評価を行うと同時に、自己主導学習というアンドラゴジーの基礎的な前提に対する受講者の認識とアンドラゴジーを日本の高齢者教育に適用する際の留意点について検討を加える。

(2) 研究方法

①質問紙について

質問紙はノールズのアンドラゴジー理論に基づき、筆者が作成した質問紙を使用した。ノールズは著書¹⁶⁾の中で、アンドラゴジーにおいて重視する項目として、「学習者の自己概念が自己主導的である」「学習者の経験が他者の学習資源として有用であると同時に、自分の学習にも役立つ」「学習のレディネスは、社会的役割、生活課題や直面する問題等に応じて展開されていく」「学習の方向性は課題または問題中心型である」という4項目を挙げている。ノールズは後に、第5項目として、「動機づけ (motivation) が興味・関心などの内的誘因から生じる」ことを付け加えている¹⁷⁾が、先の著書においては、動機づけは自己主導的自己概念の中で論じられてい

るので、本研究においては先の4項目を教育の場において実践するために考慮すべき事項とした。

上記のようなアンドラゴジーに基づく実践のために考慮すべき事項としてノールズが述べている内容を13事項にまとめた。具体的な質問の表現は、ノールズが示している具体例をもとに、「シルバー介護士養成講座」における状況に合わせて決定した。質問項目は30問であるが、30の質問それぞれについて、「シルバー介護士養成講座」の評価と受講者自身の学習のための重要性を問う項目が一对になっており、合計60項目より構成されている。また、講座の評価と重要性共に、それぞれの質問項目について、全くそうである（3点）から全く違う（0点）の4段階評価となっている。

また、フェイスシートには、対象者の属性と現在までの学習経験、および講座の受講動機と現在までの地域活動の経験を聞く7項目を加えた。

②対象者

1999年2月に行われた「シルバー介護士養成講座」修了者28人のうち、調査への同意が得られ、調査の依頼が可能であった22人に対して質問紙を手渡し、郵送にて回収した。回収数は17人(77%)であった。

③データの分析

分析には回答している項目数が質問紙の全項目のうち75%未満であった1人を除いた16人分のデータを使用した。データは、統計ソフトSPSSを用いて、各項目毎の記述統計を分析した。

(3) 結果および考察

①回答者の属性

回答者の性別は、男性2名、女性14名であり、平均年齢は65.7歳(56～73歳)であった。学校教育を受けた平均年数は11.3年(8～14年)であった。講座受講のきっかけは、自分から申し込んだ者が7人、社会福祉協議会や老人クラブから誘われた者が8人、その他1人であった。また、講座受講前にも何らかのボランティア活動を行っていた者が12人、民生委員をしている者が3人と多かった。取得している資格はホームヘルパーが2人であった。

②講座の評価と受講者自身の学習にとっての重要性の認識の比較

アンドラゴジーの実践のために考慮すべき13事項毎に得点平均を算出し、講座の評価と自分自身にとっての重要性の認識について一对で比較したのが図2である。講座の評価と重要性の認識について得点を比較すると、講座ではそのような配慮がなかったが、自分の学習にとっての重要性は高いという事項は、「学習計画への関与」「学習の自己評価」「課題の明確化と決定」という学習計画と評価に関するものと、「学習者の経験の活用」「実践的な課題への応用」「学ぶ経験」という受講者の経験を学習活動の中でどのように扱うかという内容であった。これは、16人分のデータであるので統計的な有意差は検定していないが、前述した筆者の参加観察法によるデータを合わせて考察しても、この結果は講座の実態を反映しており、妥当性が高いと考

えられる。

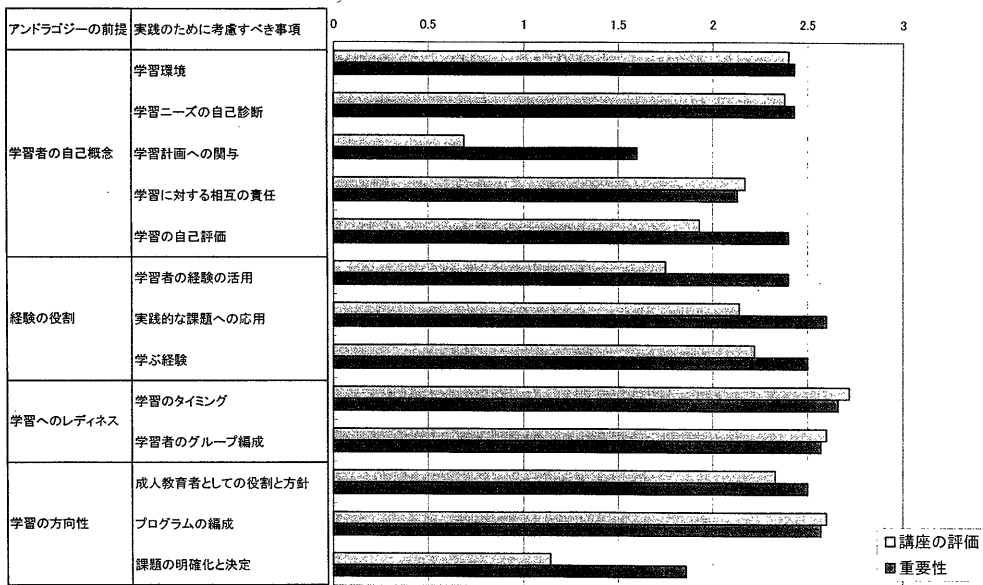


図2 講座の評価と受講者にとっての重要性の比較

池田¹⁸⁾によると、アンドラゴジーのプログラム実施においてペダゴジーとアンドラゴジーを峻別するものは、学習の相互的計画化(mutual planning)の構造やメカニズムを確立する段階である。つまりアンドラゴジーにおいては、学習の計画を立案する際に対等で重要な役割を果たすように位置づけられているのである。しかし、「シルバー介護士養成講座」においては、日程や内容を講座の主催者が決定した後で受講者を募集しており、受講者が講座の中で自らの学習を計画するには配慮されていない。従って、「学習計画への関与」の受講者の評価得点は、0.69と全ての項目中で最低となっている。これと関連して、学習の方向性を決定するための「課題の明確化と決定」に関する講座の評価得点をみても1.14と低く、このような活動が講座の中で行われていないことを示している。さらに、この項目に対する高齢者自身が認識する重要性の得点も、「学習計画への関与」が1.60、「課題の明確化と決定」が1.86と他の項目に比較すると相対的に低く、高齢者が自分で学習を計画するような必要性を感じていないことを示している。これは、講座受講者の教育歴や現在の成人教育の現状から判断して、現在まで高齢者が受けてきた教育が教師主導型であり、高齢者が教師と共に学習計画を立案するような体験を持っていないこととも関係があると思われる。

このような結果から、今後は学習計画を立案する際には、受講者と講師の相互の検討の中で学習計画を立案する過程を導入し、高齢者の自己主導性を高めていく事が、実践的な課題に対応した高齢者教育を実施する際のポイントの1つになると考えられる。今回の質問紙調査の得

点から判断すると、講座の受講者が学習計画を立てる段階に参加することに重要性をあまり感じていない原因は、講座修了者の活動がまだ一般に知られておらず、活動内容も地域によって相違があるために、講座を受講する際に受講者が自分にとってどのような知識や技術が必要であるかを明確に認識できないことも影響していると考えられる。従って、プログラム実施に際しては、まず講座修了後の活動内容を紹介した上で個々の受講者がどのような活動が可能であるかを自分自身で判断し、その活動に必要な学習内容を決定するという過程を組み入れる必要がある。さらに、継続的・循環的な学習活動を想定すれば、実際に地域福祉活動を実践していく中で、それぞれの個人が必要とする学習内容が明確になっていくと思われ、継続的な学習を促進するためには、学習機会を提供する者との個別的な関りが重要となる。さらに、このような高齢者に対して教育を行う講師と高齢者の継続的・個別的な関わりや、活動を行っている高齢者相互の交流の中で、自分の学習に対して高齢者自身が診断し、決定し、行った学習や学習に対して評価するという自己主導性が育まれる可能性がある。

次に、学習のデザインを実際の学習活動に移す過程においては、成人学習者は独自の経験の蓄積を持つ存在として、学習者であると同時に教育者でもあるという位置づけが与えられている。ここでいう経験とは、講座の内容に直接関係するものだけでなく、高齢者各自の持つ豊かで多様な経験の意味であり、学習者相互あるいは学習者と教師相互の諸経験の交流による学習の深化をはかる学習計画が重視される。これは同時に、そのような経験が高齢者の人格とも深く結びついており、経験を拒否することが高齢者自身の人格をも無視することになるという心理学的な考え方がある。しかし、講座の学習活動の中では主に講師からの一方的な知識の伝達である講義形式が多く、模擬体験や実演・実習のような参加型・体験型の形態は少なかった。このような講師からの一方的な知識の伝達は、主にペダゴジーにおける学習形態であり、「学習者の経験の活用」の評価得点も1.75と低くなっている。しかし、自分の学習にとっての重要性の得点は2.40と高くなっており、受講者は体験型の学習形態や相互の交流による学習、また学習経験を実践的な課題に応用するというアンドラゴジー的な学習形態を希望していた。

上記のような結果は、「シルバー介護士養成講座」の目的である高齢者の持っている豊かな経験と力を生かすという趣旨が、実際の学習活動の中ではうまく生かされていないことを示している。この原因については、まず講座の主催者側が立案したプログラムに沿って、講義内容を複数の講師で分担しているために、講座の立案者と講義を担当する講師が同一ではなく、各々の講師は講座の一部分だけを数時間担当するだけとなり、受講者との相互の関係が構築しにくいことがあげられる。受講者を個別的に扱い、相互の交流を促進する目的で受講者はネームプレートを胸につけているのであるが、講師がそれを活用できていないのである。講義中心ではなく、受講者相互の交流ができるような小グループによる学習形態など多様な教授方法を導入したり、講師が継続的に関われるようなプログラムを工夫したりすることが必要であると思われる。

アンドラゴジーの実施における最終過程は、学習の結果を評価し、学習目標と現在の遂行との間のギャップを再診断する過程であるが、ここでも学習者と教師の相互的再診断や相互的測定が重視される。「学習の自己評価」の講座の評価得点は1.93と低いが、自分の学習にとっての重要性の得点は2.40となっている。生涯学習における学習成果の評価に関して、文部省の白書『我が国の文教施策』の中では、厳密な評価を想定せず、どちらかと言えば学習を奨励することに主眼が置かれた評価もなされているとして、例として修了証、認定証の交付が挙げられている¹⁹⁾。「シルバー介護士養成講座」も全科目出席で初めて知事名の修了証を交付しており、いわば学習に対する報償としての評価である。しかし、受講者の現在の力を客観的に評価することや今後の学習課題について検討することは行われておらず、受講者が講座を修了した後の学習や地域での活動に対する個別的な対応も行われていない。ただし、総理府の『生涯学習に関する世論調査』(1992年)では、学習の成果を評価するのがよいとしたのはおおむね7割であったとして、評価と相容れない面があることも認めている。しかしこれは、健康・スポーツや趣味・教養といった学習する事自体が自己目的化した場合を想定しており、「シルバー介護士養成講座」のような学習成果を実際の地域活動に生かそうという手段的な学習においては、自己評価を含めた評価の形態を工夫する必要があると思われる。

「シルバー介護士養成講座」のような地域福祉活動に必要な知識と技術の習得を目的とした学習においては、講座の学習内容が広範囲にわたるという特徴がある。池田²⁰⁾は、この点について、学校教育においては、通常全学習過程を単一の教師が計画実施するのに比べて、成人教育のプログラムの実施においては各専門の教育指導者を講師として依頼し、その部分の実施責任は講師に委託することが多いという事実を取り上げ、これが成人教育のショートサイクル性と学習課題の多様性からきていると指摘している。従ってアンドラゴジーモデルにおいては、成人教育の専門的指導者すなわち成人教育者の第一義的な役割は、プロセスのデザイナーないしマネジャーの役割となる。この場合、アンドラゴジーの実践における中心的過程である学習活動が参加者の特質に合ったものでなければ、学習の効果を上げることはできないのであるが、実際に教授活動を行う者は、担当分野の専門家であっても成人あるいは高齢者を教育する専門家ではないという点を考慮する必要がある。高齢者の特質に適合した高齢者教育は、身体的・精神的特性を考慮して環境を整えるだけでなく、学習内容を相互の合意に基づいて計画することから、学習成果を相互に評価して次の学習活動につなげることまで、アンドラゴジーの原理に基づく実践過程すべてに当てはまるものである。従って、高齢者教育を実践する担当者は、直接教授活動にあたる講師の教授活動を含めて、プログラムの具体的実践の場でこの原理が生かされるように、プログラムのプランナーやプロデューサーとしてだけでなく、学習内容のプログラマーや学習経験全体のコース・プランナーおよび評価者など、全体的で多様な役割を引き受ける必要がある。

V. 結 論

本研究では、高齢者を対象とした講座で行われている学習活動と、受講者の学習者としての特徴について分析した。分析によって得られた結果を総合すると、今後の高齢者教育の方策について、いくつかの留意点が明確になった。

まず第一には、高齢者は学習に対する動機づけを持ち、手段的学習を行う能力を持っているという点である。これは、「シルバー介護士養成講座」が過去4年間で約400人の修了者を出し、修了者たちが多様な地域福祉活動を行っている状況や、年に3回実施している講座は常に定員以上の受講希望者がいるという点からも明らかである。

第二には、学習活動に際しては、高齢者の身体的能力の低下を補うような学習環境に配慮するとともに、学習への集中を高め、主体的な学習活動が促進されるような教授方法を開発することが必要である。これは高齢者を対象とした講座を計画する担当者が、アンドラゴジーの実践過程全体にわたって多様な役割を受け持つと同時に、実際に教授活動を行う講師をはじめ、高齢者教育に関わる人すべてが高齢者の特性に対する意識を高め、高齢者教育を実践する技術について習熟する必要があることを意味している。

第三の点は、高齢者の経験を尊重することである。高齢者の多様な経験は、学習への動機づけを高めるとともに学習活動においても重要な学習資源となる可能性を持っている。従って、学習活動の中で高齢者の経験をどのように扱っていくかが今後の学習プログラムにおける重要な課題となる。

第四には、高齢者が学習を計画する段階から関わる必要がある点があげられる。これは、高齢者の主体的な学習活動への前提であるとも言えるが、高齢者自身は学習計画へ関与する重要性をあまり認識していないという結果をふまえると、まず具体的な学習目標を提示した上で自分の能力の自己評価を行う等の方法により、主体的な学習方法に対する高齢者の認識を高める必要がある。

以上のように、高齢者の手段的な学習活動における留意点は明らかになったが、これらを具体的にどのようなプログラムにおいて実践していくのかは、今後に残された研究課題となっている。今後は、本研究の結果をふまえて事例研究を積み重ねながら、高齢者の主体的な学習活動を促進するような教授方法を開発していくべきである。

〔注〕

- 1) 厚生統計協会：国民衛生の動向，第46巻第9号，pp.74-75,1999.
- 2) 渡辺修一郎：老化予防の指針，東京都老人総合研究所編，サクセスフル・エイジング，株式会社ワールドプランニング，pp.66-67,1998.

- 3) 西岡正子：高齢者の学習ニーズと学習方法，関西教育学会紀要，第19号，pp.176-180,1995.
- 4) 総務庁編：平成11年版高齢社会白書，p.80,1999.
- 5) Glass, J. Conrad Jr, *Factors Affecting Learning in Older Adults* : Educational Gerontology, Vol.22, pp.359-372, 1996.
- 6) 日本生涯教育学会編：生涯学習事典，東京書籍，p.192,1990.
- 7) 日本生涯教育学会編：前掲書6),p.26.
- 8) 西岡正子：アンドラゴジー，西岡正子編著：生涯教育論，佛教大学通信教育部，pp.300-319,1999.
- 9) 川延宗之：高齢者教育事業の編成と展開，塚本哲人編：高齢者教育の構想と展開，全日本社会教育連合会，p.72,1990.
- 10) 総務庁：前掲書4), p.67.
- 11) 総務庁：前掲書4), p.37.
- 12) 高知県企画振興部統計課：県勢の主要指標平成10年度版，高知県統計協会，p.7,1999.
- 13) 西岡正子：高齢者教育と学習機会，遠藤克弥 編著：最新アメリカの生涯学習 その現状と取組み，川島書店，p.93,1999.
- 14) 総務庁：前掲書4),p.33.
- 15) 厚生省監修：平成12年版厚生白書，ぎょうせい，p9,2000.
- 16) Knowles, Malcolm S. , *The Modern Practice of Adult Education From Pedagogy to Andragogy* : Association Press, pp.40-62, 1980.
- 17) Knowles, Malcom S., "Applying Principles of Adult Education in Conference Perentations" *Adult Learning*, Sept.-Oct. 1992. pp.11-14.
- 18) 池田秀男：成人教育学の原理，池田秀男他：成人教育の理解，実務教育出版，p.33,1987.
- 19) 文部省編：平成8年度版 我が国の文教施策，p.72,1996.
- 20) 池田秀男：前掲書18),p.32.

(みやうえ たかこ 高知女子大学社会福祉学部)

(指導教員：西岡 正子教授)

2000年10月18日受理

